

[講演要旨]

元島遺跡周辺（静岡県磐田市）で見られる4世紀から中世にかけての津波堆積物

藤原 治¹・青島 晃²・北村晃寿³・佐藤善輝⁴・小野映介⁵・谷川晃一朗¹・篠原和大⁶

(1: 活断層・地震研究センター, 2: 磐田南高校, 3: 静岡大学理学部, 4: 九州大学大学院, 5: 新潟大学教育学部, 6: 静岡大学人文学部)

Tsunami deposits between the 4th and 15th century around the Motojima Ruins, Iwata City, Shizuoka Prefecture
Fujiwara, O.¹, Aoshima, A.², Kitamura, A.³, Sato, Y.⁴, Ono, E.⁵, Tanigawa, K.¹ and Shinohara, K.⁶ (1: GSJ/AIST,
2: Iwata-minami High School, 3: Shizuoka Univ., 4: Kyushu Univ., 5: Niigata Univ., 6: Shizuoka Univ.)

はじめに

静岡県磐田市の元島遺跡とその上流で行われている河川改修工事の法面では、シルト質の湿地堆積物に15世紀以前に堆積した4枚の津波堆積物（下位から津波堆積物①から④）が見られる。いずれも海-陸方向に数百m以上追跡され、海側から陸側へ細粒化・薄層化することや、陸側へ向かう流れを示す堆積構造を持つなど、洪水ではなく津波の遡上で形成された証拠を持つ（藤原ほか, 2012）。

津波堆積物の特徴と年代

津波堆積物①は成層した礫質粗粒～細粒砂層で、層厚は最大70cm以上に達する。津波堆積物②は層厚10cm未満で、級化を示す中粒～細粒砂層である。津波堆積物③は元島遺跡では成層した中粒～細粒砂層（層厚20cm程度）であるが、約500m上流の工事現場ではリップル葉理を持つ極細粒砂層やシルト層（層厚5-10cm）からなる。津波堆積物④はリップル葉理を持つ細粒～極細粒砂層とシルト層の細互層で、層厚25cm前後である。

津波堆積物の年代は主に¹⁴C年代測定結果から推定した。津波堆積物①の堆積は7世紀後半と考えられ、これは廻間Ⅲ式後半の柳ヶ坪型壺（4世紀後半）の破片を含むこととも調和している。土器は津波で掘り起こされ混合したと考えられる。津波堆積物②, ③, ④の形成は、それぞれ9世紀後

半, 11世紀後半, 15世紀後半と推定された。

歴史記録との照合

津波堆積物①が堆積した7世紀後半には、白鳳地震（684年）が起こっている。この地震の歴史記録は南海地震のみで、東海地震の存在は袋井市の坂尻遺跡などで報告された液状化痕から推定されていた。津波堆積物①は白鳳地震に対応する東海地震が存在した証拠となる。津波堆積物②の時代には、南海側で仁和地震（877年）が起こっている。このことから、仁和地震にも東海側でペアとなる地震の存在が示唆される。

津波堆積物③は1096年永長地震に対応すると考えられる。この地震では駿河国と伊勢国が津波の被害を受けたことは歴史記録から知られていたが、遠江国でも大きな津波が来襲したことが確認できた。津波堆積物④は1498年明応地震に対応すると考えられる。元島遺跡では15世紀まで栄えた湊街の跡が発掘され、それが16世紀になると急に寂れたとされる。この衰退は考古学上、明応地震と津波の影響とされてきたが（加藤, 1999）、津波堆積物の発見により考古学的な考察が裏付けられたと言える。

引用文献

加藤理文（1999）元島遺跡Ⅰ（遺物・考察編1—中世—）静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第116集, 373-391.

藤原 治ほか（2012）日本第四紀学会講演要旨集.